
死者の 1 4

花泉カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者の14

【Nコード】

N0555C

【作者名】

花泉カヲル

【あらすじ】

ある日突然に、誰かの記憶をもらってしまったら！？フラワー・アーティスト【りみ】の不思議体験。

第一話【黒猫の瞳】（前書き）

あまり怖いホラーではありません。
ミステリー仕立てです。

第一話【黒猫の瞳】

白昼夢。

はじめはそう思った。

ふとしたことで、会ったこともない少年の事を思い出してしまう。

自分と話す彼の横顔がとてもせつない。

まるで、誰かの代わりにしゃべっているみたいで、不思議な感覚だった。

それがリアルすぎて怖くなったのは、いつも行く楽器店での出来事がきっかけ。

ピアノコーナーで、なぜか足が止まった。

何気なく手を伸ばすと、鍵盤をはじく。

「あれ、ピアノなんて弾けたんだ？」

となりで親友の千秋がいう。

「そうみたい。」

内心、鳥肌立ちそうなのに無理して笑い、私は足早に楽器店出て、友人に別れを告げた。

ピアノなんて弾いたこともない！

なのに自分の手が勝手にピアノを弾いてしまう！

長年生きてきて、こんなに怖い思いをしたのは始めてだった。

なにが原因？

よくある話で、幽霊にでも取り憑かれちゃった？

お被いでもしてもらわなきゃあとか考えながら歩いていると、うしろから声がした。

「御手洗^{みたらい}りみ。」

ハスキーな声に驚いてふり向くと、一人の男が立っている。

「違う？」

黒ネコみみたいな感じ。

品定めするような目線がこっちをまっすぐ見ている。
その瞳に見覚えがあった。

「御手洗になんか用？」

「バス事故のことで訊きたいことがあるんだ。」

鳥肌が立つ。

ああ、こんなことじゃないかと思ったんだ。

「俺は、ゆうつり。」

「苗字は？」

「あんたは知ってるよ。」

ドクンと心臓が高鳴った。

私の記憶にある彼と、目の前の男が重なって、一人の人間になった。

「武田裕里。」

同時に、ある事件が私の頭の中で再生される。

「高千穂・・・バス転落事故。」

男は口元を引き締めて私を見ていた。

逃げ出したい。

でも、私は逃げ出せなかった。

「私の記憶とあなたは関係あるのね？」

「そう。」

「どこで話す？」

「私の事務所で。」

「事務所？」

彼が目を丸くして驚いたのを見て、私は思わず笑ってしまった。

そのとき初めて彼は、目の前の女が、自分のまったく知らない女性だと気付きでもしたかのようで、なんだか可笑しかったのだ。

私は、わたしの中でうごめくあの記憶が、何なのか解る気がした。

——誰かの記憶——

そしてそれは、私だけに起きた現象でないことを、私は後に知る事になったのである。

第二話【14分の1の幸運】

「あんたマジで花屋？」

殺風景な事務所の中で、武田ゆうりが、うさんくさそうに辺りを見まわす。

「花屋といっても、創るのは花嫁のブーケだけだから、必要な分だけ仕入れるのよ。」

「ああ、アーティストってやつか。」

ブーケを創る作業台にコーヒークップを二つ置くと、ゆうりがそくざに一つ手にとって口をつける。

花を入れる冷蔵庫はない。代わりに、この部屋自体の温度が冷蔵庫なみに低いのだ。

「霊安室。」

ゆうりが眉をひそめていった。

「消毒薬の臭いはしないわ。」

「うん。」

彼の苦い表情が、自身の体験を物語っている。

二十代前半のようだけど、時々それよりはるかに歳をとってみえるのは、心にある傷のせいかもしれない。

「あの事故で亡くなったのは、ただ一人だったわね。」

「俺の妹だ。」

コーヒートの湯気が、彼の表情を隠し見えない。訊いてしまったことを後悔したが、すでに遅すぎた。こうなれば、思い切って会話をつづけるしかない。

「苗字がちがうのは？」

「両親が離婚して、俺は親父に引き取られたんだ。」

ゆづりが少しコーヒートを飲み、また口を開く。

「妹は母親といなくなった。・・・もう、10年以上前になる。」

今度は飲まずにカップの中を見ていた。

「次に奈緒を見たのは霊安室だったよ。」

「・・・そうだったの。」

亡くなったのは彼の身内かしらと感じてはいたが、それが真実となると、やはり心臓がちくりと痛む。

私でさえ、いまだバスに乗るときは緊張してしまうのだから。

「あんたケガの後遺症とかは？あつ、バス恐怖症なのは当たり前だ

ろうけど。」

「えっ、私は・・・他は平気よ。」

私はいきなり心配されて驚き、しどろもどろになって答えた。

「そうか、よかった。」

少し安心したように彼が微笑んみ、私ははっとした。

「同じ笑顔・・・。」

「なにが？」

「あの事故以来、今日あなたに会うまで、私、会ったこともないあなたを思い出していた。」

「今よりもっと若いあなたを。」

ゆうりの瞳が大きく瞬いた。

「どんなふうによ？」

私は、彼にまっすぐに見つめられて、なんだか居心地悪くなってしまったが、彼は答えを待っていた。

「あなたは、よく河原でサッカーの話しをしてくれてた。」

ゆうりは懐かしそうに微笑んだ。

「俺は中学までサッカー部だった。転校してやめちゃったけどな。」

「あなたはいつも楽しそうに笑ってた。」

「・・・そう、あの頃はね。」

あの頃という言い方に、それからの日々が平穏でなかった事を読み取って、私は話を続けるべきか躊躇した。

「父親がリストラされてから、そんなふうになんか笑えなくなっていたみたいけど。」

「怖い顔をしたあなたは見た事ないわ。」

私の言葉に、彼は一瞬驚いたように目をしばたかせ、やがて失望したように小さくため息をついた。

そして、「そうか。」といったきり空になったコーヒークップを見ていたが、また寒さが襲ってきたらしく、体をさすりながら時計に目をやった。

「これは、本当にあなたの妹さんの記憶なの？」

「おそらく。」

コーヒーのおかわりを勧めたが、彼は首をふって時計を指差す。

「なぜ、私が彼女の記憶をもっているのかしら？」

「俺にもわからないよ。」

「私は彼女の幽霊にでも取り憑かれてるのかも。」

「いや、そういうんじゃないと思う。」

ゆうりのきつぱりした口調が意外で、私は目を丸くして彼を見た。

「なぜ、そういいきれなの？」

「他にもいるんだ。」

「えっ？」

「あんたみたいに、奈緒の記憶をもっている人が。」

「うそでしょ？」

「でもみんなそれぞれ違う。断片的で、それひとつでは意味がないようにみえる。」

「白昼夢。」

私が呟くと、ゆうりは目を細めて私を見た。

「そう、まるで白昼夢みたいに。だからみんな、自分がおかしくなったのだと思うのかもしれない。」

「人に言えば、精神科に行けといわれるわね。」

「セラピストっていうんだ。今は。」

英語でいえは別物みたいに聞こえるが、私にとってはそう違いはない。

行かなくてよかったと思った。同時に胸にひっかかっていた疑問を彼に尋ねた。

「ねえ、あなたは どうして私が記憶を持っていると思ったの？」

「事故の後、町で見知らぬ男に呼びとめられたことがある。」

ゆうりは、話すかどうか迷っているように見える。

「その人は、夢で俺を見たといってた。その夢の中で、俺は、母親に、『死ねばいいのに！』といったらしい。」

子供が反抗期になり、親や他の大人にそういった暴言をはいたりすることはあるだろう。

けれど私は、ゆうりの表情から、その言葉にもっと深刻な背景があることに気付いた。

おそらく、彼は本気で死ねばいいと思っていたのだろう。

私は勝手に彼のカップにコーヒーを注いだ。

彼は、無意識にそれを手にする。

「それが事故の被害者の一人だったの？」

「ああ、それがはじまりだった。」

「それから、ニュースで、俺の顔を見たという人が、電話をしてきて、同じように白昼夢のことを話してくれたよ。」

「私、あなたの顔なんて見てないわよ。」

「顔は出さないように報道関係にはいつといたんだけどな。いくつかの週刊誌が無視してだしたみたいだ。」

「でもあなたは、私に会いに来た。」

「あんたは美人だからさ。」

ゆうりが人の悪い笑みを浮かべ、肩をすくめる。

ただの社交辞令だろうが、私は自分の顔が赤くなるのを感じてたじろいだ。

いつもなら、かるく受け流す余裕はあるのに。

「なんていって、バスに乗っていた人みんなに訊いてまわってるんですよ？」

「まあね、実はそうなんだ。」

ゆうりは悪びれもせずに認めた。

「だけど今更彼女の記憶を探してどうするの？」

彼女はもういないのに、という言葉は飲み込む。

「知りたいんだ。過去を。」

「俺と別れてから奈緒がどんな一生を送ったのか。」

「わからないの?」

「奈緒が死んだとき、あいつはほとんど何も持ってなかった。」

「身分証も役所の住民票も母親の離婚したときのままだったし、でもそこも、近所の人の話じゃ、何年も誰も住んでない。」

「どういうこと?」

「さあ?俺にもわけがわからない。」

するとデニムのポケットから、携帯の着メロが聞こえてきた。

「ごめん、俺、これから人と会わなきゃならない。」

「私、お役に立てた?」

「十分に。」

そのときゆうりが見せた笑顔は、あのころと同じものだった。

また心臓の鼓動が早まって、私はあわててドアを開けに席を立った。

後から歩いてきたゆうりがいった。

「また、話をきかせてもらえる？」

「仕事が忙しくなければ。」

ゆうりは頷いて名刺を差し出した。

私はそれを受け取って文字を見、彼を見直した。

「メイクアップ・アーティスト!？」

「そう、同じアーティストってわけだ。世界は違っけどね。」

「同じ生き物を使う。」

私が言うのと彼は嬉しそうに微笑んだ。

「どちらも、生き物をより美しくみせる仕事。」

私は思わず笑ってしまった。彼の今度の笑顔は、今日一番好きな顔だった。

「じゃあ、また。」

かるく手を振って足早に走り去るゆうりは、振り返るそぶりすらみせない。

美人に会いに来たというわりには、あっさりしすぎだが、お世辞でも誉められて悪い気はしない。

今日だけでも気分よく仕事ができるだろう。

14人。

ふと思い出した。

あの日、私を含めバスに乗っていた人数は14人。

事故で生き残ったみんなが、死んだ奈緒という女性の記憶を持っているのだろうか？

しかしなぜ、その記憶は断片なのだろう？

色々な映像が頭の中浮かんでは消えた。

少し考えてみたものの、私は混乱してしまい考えるのをやめた。

武田ゆうりは、また訪ねてくるといっていた。

いずれ、残りの記憶の断片を彼が見つけるだろう。

あまり悪い記憶でなければいいけど――。

ネガティブな考えを振り払い、私はゆうりの笑顔を思い出そうとした。

だけと思い出せたのは、なぜかさっきの大人になった彼の顔だけ。

たぶん14人中で私は運がいいほうなのだ。

第三話【破片】

「白昼夢？」

私の話を聞いた谷川泉は、カフェ中に響きわたるような大声を上げた。

「そうよ、そういうの、見てない？」

私は小声で囁いたが、泉はあいかわらず大声で聞き返す。

「いきなり呼び出すから何かと思ったら、心理テストなんてどういうつもり？」

「あの日、事故にあってから、見てない？」

今度の質問に、泉はギョツとした表情になった。

「やっぱり、あるのね？そういうのが。」

「なんで知ってるのよ！」

泉が口調を荒げて私をにらむ。

谷川泉は、私が花屋を始める前からの知り合いで、OL時代には、二人でよく旅行に行った仲である。

事故の日も、私たちは宮崎県の高千穂という所に行き、神楽を見るツアーに参加していたのだ。

幸い、泉も私も軽症で、事故の後遺症は、バス嫌いになったことぐらい。

泉が、パンパンのサイフから小銭を出して、ラテを頼んだ。

最新のファッションに身を包み、ブランドのバッグを持ち歩く彼女だが、キャッシュ・カードは持っていない也使えない。

「私も見るの。それに、他にも同じような体験をしている人がいるんだって。」

「うそよ……。」

「誰かが自分を奈緒と呼ぶの。」

泉があんぐりと口を開け、大きく息を吸った。
暫くして、眉間に大きなシワを寄せて私を見つめきいてくる。

「一体、私たちに何が起きているのかしら？」

「私たちは皆、あの事故で、亡くなった奈緒という少女の記憶をもらった……。」

「私たち？」

「そう、あの時観光バスに乗っていた彼女を除いた14人。」

「どうしてそんな……？」

「わからない。」

「わからないーっ？」

私は、再び大声になった泉をなだめ、コーヒーを飲むよう即した。彼女は大人しく従い、カップに手をつけたが、匂いを嗅いだけだった。

バックの中をかき回し、タバコを取り出すと火をつける。

そして、私が武田ゆうりのことを話すと、泉の眉間のシワはさらに深くなっていく。

「絶対、ウソだわ。」

「そう思いたいわね。」

はっとした泉が無表情になったが、すでに刻まれたシワは残ってしまった。

「あなたの記憶を知りたいの。」

「何のために？その男と親密になりたいの？」

「そうだとしたら？」

「それならいいわ」

艶やかに泉が笑う。

自分のカードは使えなくとも、バックなんて他人が買ってくれるものだと泉はいう。

充分その価値がある唇だ。

「正直あまり思い出したくもないんだけど。」

泉は身震いして話し始めた。

「私に見える女は、奈緒って子の母親みたい。」

「あいつ、しょっちゅう私を殴った。」

激しい嫌悪感が、泉の表情をくもらせた。

「いつも酔ってて、機嫌が悪くて、たまに何か言つと口論になる。」

「父親や、お兄さんは出てこない？」

「いいえ、そんな人はでてこないけど。」

父親も兄もいないなら、泉の記憶は、両親が離婚後の奈緒の記憶だ。

私はちらりと、武田ゆうりの顔を思い浮かべ、あわててコーヒーに口をつけた。

顔が火照ったように赤くなった。

「たまに酔っている人を見ると怖くなるのよ。」

「記憶のせいかもしれないわね。」

「もしかしてあの子は、父親から逃げていたんじゃないかしら？」

泉の言葉に私は驚き、コーヒーをむせそうになってしまった。

「ほら、覚えてない？あの子一人でバスに乗ってきたでしょ？」

「そうだったかしら」

「高校生ぐらいの女子が、たった一人で神楽なんて見に行かないでしょ。若い子にしてはシブイ趣味だと思ったのよね。」

流石は噂好きな泉。自分以上に人の動向が気になるらしい。

「そうか、お兄さんがいたのよね。」

「彼は別れた妹の事を心配してた。だから、彼女が自分と別れて、らどうしていたかを知りたいってたわ……。」

泉はか空を眺め、何か考えているようだったが、やがて口を開いた。

「私ならいわないな」

「そうでしようね。」

「そして、りみは全部いう。」

私は見透かされても驚かない。

私たちの性格は、まるでコインの裏表。

だから相手がよくわかる。

「彼に会うには理由があるの」

泉は鼻をならし、短くなったタバコを消して、席を立った。

「傷は最小限になるように。」

「わかってる。」

背筋を伸ばし歩き去る、泉の後ろ姿を見ながら、私は想像していた。

この話を聞いたら、武田ゆうりは、どんな顔をするだろう？

私は残酷な人間かもしれない。

どんな表情でもいい、見てみたい気がする。

そのために、彼が、砕け散った記憶の欠片を拾い集める手伝いをしたい。

カフェを出て歩き始めたとき、携帯の着メロがなった。

話題の人本人だった。

第四話「携帯とストラップ」

「家出？」

母親が妹を虐待していたと聞いても、ゆうりの表情が変わる事はなかったが、最後に見た状況を聞くとほんの少し驚いた。

「なぜ高千穂なのかしら？」

「そこに身寄りはないよ。」

「神話が好きとか。」

思いがけずゆうりが笑う。

「神を信じてないのね。」

「いや、信じるよ。今はね。」

信じざるを得ない、というのが正しいのかもしれない。

今日は先日と違い、大きなガラスの花瓶には、仕事の為の生花が生けられ、ゆうりは興味深げにそれを見ている。

「あんたが、泉さんの話を訊いて来てくれて助かったよ。」

「私、助手になれそうでしょ？」

「どっちかというと探偵のほうだな。」

今日は、ミネラルウォーターのボトルを彼に差し出す。
彼は、考え深げにボトルを見ながらキャップをひねった。

「それで、あなたは？」

「家に引きこもっている学生に会った。」

「作田圭。」

「男の子ね。」

私は、事故の後、病院の廊下で頭をかかえる少年の姿を思い出していた。

ゆうりがボトルに口をつけて顔をしかめる。

「正確には、ドアの前で一方的に話しかけたただけなんだけど。」

「彼は何かいった？」

「何も。」

いつも皆おしゃべりとは限らない。

「彼はあの日、あの子の隣に座っていたの。」

ゆうりは、一瞬私を見て言葉を待った、

「彼が奈緒さんの最後を看取った。」

私の一言が、彼にもたらした痛みを見て取り、私の中で警鐘が鳴りひびく。

痛手は最小限に、という泉の言葉が聞こえたが、私は無視した。

「あつという間だったのよ。ホントに。」

「ああ。」

こめかみを押さえた彼の指が少し震えてみえた。

「あなたの心の支えは何？」

私は、生きている人間が心配になった。

「仕事。」

目を閉じて彼は言い切る。

「あんたは？」

「右に同じ。」

まだ目を閉じたままくすくす笑う。

「大丈夫。それほどやわじゃない。」

「母親の行方はわかりそう？」

「いや。」

ゆうりは、手をさすって暖をとろうとしていたが、諦めてチョコレート色の薄手のジャケットのポケットに手をつ込んだ。

「そういえば、今日、遺品を返してもらったんだが。」

そういつて、ポケットから、ビニール袋に入ったピンクの携帯を取り出した。

「奈緒さんのね。動く？」

「残念ながら水に濡れてこわれちゃってる。」

「しっかし女の子ってのは、なんだってこうゴチャゴチャと、色んなストラップをくっつけたがるんだろっな？」

ゆうりは、携帯よりも重いストラップの束にあきれながらいう。

「くれた人と一緒にいるような気になるからかも。」

「ふうん？」

ちらりとデスクの上の私の携帯を見て、納得したようにビニールをしまった。

すると、いきなり彼の携帯が鳴り、ゆうりはあわてて自分の携帯を取り出した。

「もしもし」

相手のくぐもった声がもれ聞こえる。

「ああ、作田圭くん……。」「

ゆうりが少し緊張してみえた。

「わかった。明日七時にそのネットカフェにいけばいいんだね?」

暫くして電話を切ったゆうりは、ほっと息を洩らした。

「何か話してくれるって?」

「ああ。」「

「よかったわね。」「

私の言葉に、彼は頷いて笑みをうかべたが、すぐにまた真顔に戻って何かを考えているようだった。

「あんた休みはいつ?」

「なぜ?」

「実はもう一人、会わなくちゃならない人がいるんだけど、彼女は
どうも男性が苦手らしくて、いつ訪ねても、一言も話を聞くこと
ができないんだ。」「

「女性なら話すと?」

「たぶん。」

ゆうりは、自信なさげにいった。

「あさつて、月曜の午後なら。」

「ありがとう。」

ほつとしたように笑った。

そして、私は月曜日、小さな女王様と出会うことになった。

作田圭と女王様のもたらした情報が、その後の私たちに思いがけない旅行をさせるとは、まだそのときは知る由も無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0555c/>

死者の14

2010年10月8日22時08分発行